The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞ リチャード・メイソン著 『スピノザの神 : 哲学的研究』 Richard Mason : The God of Spinoza : A Philosophical Study, Cambridge University Press, 1997
Author(s)	大塚, 高弘
Citation	メタフュシカ. 2013, 44, p. 127-132
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26547
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

≪文献紹介≫

リチャード・メイソン[1]著

『スピノザの神：哲学的研究』

Richard Mason: *The God of Spinoza: A Philosophical Study*, Cambridge University Press, 1997

大塚高弘

本書は、スピノザ[2]における「神」概念の役割を『エチカ』だけでなく『神学・政治論』も用いて詳細に論じている。本書の全体は三部から構成されており、第一部では『エチカ』における神の実在や本性が、第二部では『神学・政治論』における宗教が、第三部ではスピノザ自身の宗教が扱われている。それぞれの部は、著者自身が述べているように、互いに連関しながらも基本的には独立した議論から構成されており、読者は関心のある部から読み始めることが可能である。例えばスピノザにおける宗教に関心のある読者は、本書の第二部から読みはじめ、そこから第一部や第三部へと移っていくことができる。ところで本書はスピノザにおける啓示宗教の役割について極めて示唆の富んだ議論を展開している。『エチカ』の中では超越的な人格神や目的論は虚偽として否定されており、その帰結としてキリスト教やユダヤ教のような啓示宗教も否定されなければならないように見える。これに対して、『神学・政治論』では啓示宗教は肯定的に論じられており、スピノザは自身が「聖書と啓示をその有益性と必要性に関して極めて高く評価している」（TTP15, p.188）とさえ述べている。そのため、一見すると『エチカ』と『神学・政治論』の両著作の記述は宗教に対する態度という点で一致していないように思われる。しかし、著者が指摘しているように『エチカ』においては神と人間の宗教的実践の関係が扱われていないし、『神学・政治論』の方では哲学的な内容が直接的にはほとんど扱われていないのである。したがって両著作は主題や内容という点から大きく異なっており、両著作の不一致は宗教に関するスピノザ自身

1　著者リチャード・メイソン Richard Maison は、哲学史や道徳哲学を専門としており、スピノザ関係の著作は本書の他にも『スピノザ：論理、認識、宗教 Spinoza : Logic, Knowledge and Religion』が出版されている。

2　本稿ではテキストからの参照を示すにあたり、以下のような略号によって参照箇所を示す。「TTP…『神学・政治論』（章と Gebhardt 版全集第三巻での項づけ）」、「Ep…『往復書簡集』」。

の叙述を注意深く分析することによって解消されなければならないと考えられる。スピノザにおいて宗教の役割とはいかなるものなのか、またいかなる意味において宗教は肯定されるのかという問いに対する答えを本書の中で著者は提示しており、本稿では著者のこのような主張の概要を示したい。

著者自身の議論に入っていく前に、著者の解釈の立場を明確にするためにそれまでスピノザにおける宗教の役割に関してどのような解釈が出されていたのかということを見ていきたい。その解釈の一つとして、スピノザにおいて宗教は理性に導かれることのない人々を理性に外的に一致するように振る舞うようにさせるための装置であるというものがある。このような解釈を提示する論者の一人として著者はY・ヨベルの名を挙げている。『神学・政治論』における宗教は準理性的な役割を果たしており、理性に導かれることのない人々が理性を模倣するための機構であるとヨベルは解釈している[3]。このようなヨベルの解釈は以下のことを根拠にしている。まず執筆者というものは自身が出した結論が読者に受け入れられることを望むものであるから、スピノザもまた読者がスピノザ主義を受け入れ、スピノザ主義者になることを望んでいると我々が想定することは当然である。したがって、『エチカ』で提示されるようなスピノザ主義と啓示宗教は相互に対立するのであるから、『神学・政治論』においても読者がユダヤ教徒やキリスト教徒であることを止めてスピノザ主義者になることが望まれているということになる。しかし、全ての人々が理性によって導かれてスピノザ主義者になれるわけではないため、理性によってスピノザ主義者になれない人々を、いわば準理性的な手段によってスピノザ主義者にすることが必要となり、そうすることが『神学・政治論』の目的であるとヨベルは解釈している。すなわち、理性に導かれることは困難であるため、表象知を理性に外的にでも模倣させ、一致させる機構が必要となり、その機構こそが宗教であるということになる。このようなヨベルの解釈から、スピノザは宗教を人々が準理性的に振る舞うようにさせるための手段として純化しようとしているということが帰結されるだろう。

著者はこのようなヨベルの解釈は理解可能なものであるが、スピノザのテキストには忠実ではないと指摘している。それでは、著者はスピノザにおける宗教をいかなるものであると考えているのであろうか。スピノザにおける宗教を考察する際に、スピノザ自身の明確な言葉によって示されなかった一つの根本的な問いが存在すると著者は指摘している。すなわち、なぜ人々は宗教を必要とし、欲するのかという問いである。この宗教への動機を理解する上で著者はスピノザの原因と理由の同一視に注意を促している。というのも、宗教の「原因 causa」と人々が宗教を欲する「理由 ratio」はスピノザにおいて区別されていないからである。著者によれば、スピノザにおいて宗教的実践は自然の中の一つの現象にすぎず、その原因は理解されうるものである。そして、宗教の原因はスピノザにとって極めてはっきりとしていると著者は述べている。それは、人々がそのような社会でそのように育ったからというものである。このような宗教への動機について考える際に、スピノザにおける行為と信念の分離を本質的なものとして著者は指摘している。

---

[3] Yovel, Y. [1989] *Spinoza and Other Heretics* (Princeton University Press) p.130.

この分離は以下のような原則として表現されている。すなわち、信念に関わらず、人はよく行為することが可能であるという原則であり、さらに言えば、よく行為している限りにおいて、その人が何を信じているかということは問題とならないという原則である。また、全宗教の基礎は、神を何ものにもまして愛し、隣人を自分自身のように愛するということとスピノザは主張しているのであるが、この主張にはスピノザが自身の形而上学的見解や普遍的信仰の教義から独立してたどり着いていると著者は分析している（TTP12, p.162）。「正義と愛徳」にとってはその人が何を信じていようとも関係がない。著者によれば、スピノザにおいては理論に関係なく、このような特質は賞賛されるべきものなのである。宗教は理論や信念に関係するのではなく、行為や実践にのみ関係するのである。宗教が純粋に実践に関するものであるという意味において、宗教の原因への問いに対するスピノザの答えもまた純粋に実践的なものとなると著者は主張している。すなわち、宗教的であるということはよく生活するということであり、よく生活するということはよく育てられ、教育されているということによるのである。各々の社会は各々の歴史的原因に応じて自身の宗教を持っており、スピノザにおいてこのような多様性は当然のものと見なされている。したがって、社会において宗教の存在は消え去るものではなく、単一的な理性的宗教が歴史的宗教にとってかわり実践されることが可能であるとはスピノザにおいて考えられていないのである。「スピノザは宗教を実践において自身や他の誰かによって考案されうるようなものとは考えていなかったのであり、宗教は社会的かつ歴史的現実だった」（p.138）と著者は述べている。以上のことを踏まえると、ヨベルの解釈は退けられなければならないということになるだろう。というのも、ヨベルの解釈によっては『神学・政治論』において議論されている宗教がスピノザ自身によって考案されたものになってしまうからである。ヨベルのように解釈することは、十七世紀のスピノザをあたかも十八世紀の合理主義者と見なすようなものであると著者は指摘している。

以上のように『神学・政治論』における宗教の役割は純粋に実践的なものであり、『エチカ』で論証される真理から導出されるものではないと解釈することによって、真理や理論を主題とする『エチカ』と宗教を主題とする『神学・政治論』の記述の不一致を解消することが可能であるが、しかし『神学・政治論』の内容が『エチカ』の読者に与える戸惑いはこれだけではない。というのも、スピノザはブレイエンベルフ宛書簡において「私は預言者たちが神の信任厚い相談役であり、その忠実な伝達者であったことを固く信じはするが、数学的に確実には知らない」（Ep21）と述べているのであるが、預言者が伝達する啓示には神が感情を持つことが含まれることを考えると、書簡におけるスピノザの主張をどのように理解することができるのかが問題となるからである。すなわち、『エチカ』における人格神の否定と『神学・政治論』における啓示の肯定は矛盾するのではないかということが問題になるのである。『神学・政治論』の始まりにおいて、スピノザは「預言あるいは啓示とは、ある事柄に関して神から人間に示された確実な認識である」と定義している（TTP1, p.15）。たしかに、スピノザは預言あるいは啓示の正当性を否定するのではなく、むしろその正当性を支持していると言わなければならないだろう。それでは、啓示の正当性は『エチカ』と対立しない形でどのようにして支持され得るのであろうか。宗教の役割が純粋に実践的なものであるとするならば、神が話しをしたりする内容を含む啓示をあえて確実な認

識とするのはいかなる意味においてなのであろうか。

この問いに対する一つの解答は、スピノザの二枚舌や不誠実において理解するというものである。すなわち、スピノザが矛盾しているように見える言葉を用いる時は、違う意味をその言葉に与えているのである。ヨベルによれば宗教は準理性的な役割を果たすものであるから、『エチカ』の論証や理性と対立するような聖書の記述は比喩として理解しなければならないことになる[4]。すなわち、啓示の正当性や比喩的に解釈されるべきかどうかということを判断する基準が理性に依存しているのである。しかし、著者によればこのような解釈はスピノザ自身が批判するアルパカールの比喩的な聖書解釈と同じものである。アルパカールは聖書の中の理性に矛盾するような記述は理性と合致するように比喩的に理解されなければならないという立場を取った聖書解釈者であり、この立場がスピノザ自身によって批判されているのであれば、ヨベルの解釈とスピノザのテキストとの整合性を取ることは難しいと考えざるを得ない。それでは、スピノザにおける啓示の正当性や役割はどのように考えられなければならないのであろうか。

啓示の正当性について、多くの解釈者たちが見過ごしてきたスピノザのある主張に著者は着目している。そのスピノザの主張とは、もはや我々は預言者を持たず、聖書以外から預言者の伝えることを導出することは出来ないというものである。このようなスピノザの前提において、啓示の正当性を判定する批判的基準はそもそも必要とされていないと著者は指摘している。このスピノザの主張の弱さは明白である。すなわち、今後とも預言者が現れないとは限らないというものである。しかし、この主張には論理的な強みもまたあると著者は考えている。というのも、啓示は聖書に書かれているもので全てであるため、啓示に関する聖書の記述を列挙することのみによって、啓示を定義することが出来るからである。この強みによって、聖書の内容の吟味から神が預言者に啓示した全ては言葉もしくは形象もしくはその両方によって啓示されたということが導出されるのである。さらに、著者によれば『神学・政治論』において、このような聖書の内容の列挙のみから「神が敬虔な者や選ばれた者を決して欺かない」（TTP2, p.74）という原則もまた導出されている。そして、この原則が今度は「預言的確実性は数学的確実性ではなく、心性的確実性である」という見解を根拠づけているのである。すなわち、数学的な証明によってではなく、神は敬虔な者を欺かないということによって、敬虔な預言者に与えられた啓示が神からの啓示であることを確信することができたのである。そして、この主張はその根拠に聖書の記述内容しか持っていないのである。このようにして、預言者の伝えることが心性的確実性を持っているということは、神が敬虔な者を決して欺かないということと同じことであると著者は導き出している。そして、啓示が確実な認識であると言われる時の「確実」という言葉は、『エチカ』における数学的な確実性ではなく、聖書の記述から導出された基準による心性的な確実性であるということが帰結される。

それでは、啓示の役割はいかなるものであろうか。この問いに対する答えは、スピノザにおいては純粋に実践的な領域において理解されるものである。すなわち、その役割とは預言者がその

---

[4] Ibid. p.146.

時代や場所において社会の連帯や道徳性を強化し、服従を生み出すことである。理性に導かれた人は、道徳的にもよい行為を為すのであるが、しかし理性に導かれることは困難なことであり、そういった人々は少数であるとスピノザは見なしている。そのため、残りの人々にとっては社会が機能を果たす必要があり、また強制される道徳性が必要となるのである。スピノザにおいて、理性によっては神学の基礎的教義である「人間は服従のみによっても救われる」（TTP15, p.188）ということは証明され得ない。そして、理性に導かれることとは異なり、服従することはすべての人が例外なく可能なことであり、服従を生み出すためには理性ではなく、啓示が必要になるのである。しかし、永遠真理を理解する人は理性の導きのみによって有徳の状態にたどり着くことができるため、すべての人にとって啓示が必要だったわけではない。スピノザは自身が「聖書と啓示をその有益性と必要性に関して極めて高く評価している」（TTP15, 188）と述べており、他の箇所では、「啓示が何よりも必要だった」（TTP15, 185）とも主張しているのであるが、以上のことからここではすべての人が必要とするという意味においてではなく、すべての人が永遠真理を理解し、理性によって導かれることができないという意味において啓示の必要性が主張されていると著者は分析している。

このような著者の分析に加えて注目すべきと考えられるのは、哲学と啓示の区別が事実と価値の区別を意味しているのではないと著者が指摘している点である。すなわち、哲学によって確かめられた事実と啓示によって主張された価値という区別ではないのである。スピノザは啓示がなにより必要だったという主張にある興味深い但し書きを設けている。それは人間が服従のみによって救われるという基礎的教義が理性によっては証明され得ないのであるならば、いかなる理由で我々はそれを信じるのかという問題についてのものである（TTP15, p.185）。もし理性なしに受け入れようとするならば、判断力のない者として行動しているのであり、もし理性によってその基礎的教義が証明されうると考えるのならば、神学は哲学の一部となってしまうのである。スピノザがこのジレンマを受け入れていると著者は解釈している。たしかに基礎的教義が理性によっては証明されないからこそ啓示は不可欠だったのである。しかし、基礎的教義を信じるさいに、判断力のない者として信じているわけではない。というのも、スピノザはこの啓示された教義を確実なものとして受け入れるために我々の「判断 judicium」を用いることができると主張しているからである。すなわち、心性的確実性に先立って判断の行使が存在するのである。「判断」という言葉は『エチカ』の中では第二部命題四十九の備考で判断保留の不可能性に関して一度だけ用いられている。著者によれば、そこでは真理の受け入れに関する理性的な意志決定として「判断」という言葉が使われている。すなわち、スピノザにおいて「判断」は理性的なものなのである。そのため、理性は啓示の教えている基礎的教義を証明することは出来ないが、啓示が心性的確実性を持っているということに同意することは出来るのである。これらのことから、「理性が用いられない時に、啓示や道徳性が優勢になるという発想は誤りである」（p.160）と結論づけられている。

さらに、哲学と啓示の区別は事実と価値の違いではなく、著者の表現を借りれば「より多い認識 more knowledge」と「より少ない認識 less knowledge」の違いであるということが本書では導

き出されている。この解釈は『神学・政治論』における「自身が神に服従する義務があることを誰も自然的には知らない」（TTP16, p.198）という主張に付されたスピノザの注によっても強化されると著者は考えている。そこでは、我々は神の意志の本性を知らず、神が人々から礼拝をもって君侯のように崇敬されることを欲するかどうかということを啓示によってしか我々は知り得ないのであるが、理性の指導の下においては、我々は神を愛することは出来るが、君侯としての神に服従することは出来ないとされている。したがって、服従や命令という言葉は、相対的な無知においてのみ理解されるのである。加えて、スピノザは「預言者の表象力も、神の諸決定がそれを通して啓示された限りにおいて、やはり同等の権利をもって神の精神と呼ばれ得たのであり、また預言者たちは神の精神を持っていたと言われ得たのである」（TTP1, p.27）と述べている。スピノザは認識論的な批判を啓示に与えていないのである。啓示は表象力によってしか与えられておらず、真理ではないのであるが、著者によればこのことはスピノザにおいて啓示が神の決定であるということを少しも妨げていない。このような意味において、スピノザは啓示の正当性を支持していると著者は結論している。

以上が本書の中で著者が展開したスピノザの宗教に関する議論の概要である。著者は『神学・政治論』において啓示宗教がどのような位置づけにあるのかということを精緻なテキスト研究を通して分析している。そして、スピノザにおける宗教にとって理性に矛盾するということは本質的なものではないことが明らかにされた。というのも宗教が肯定されるのは、真理や理論の領域においてではなく、純粋に実践の領域においてであり、また理性の代替になるという理由によるものではないからである。たしかに理性に導かれることのない人々にしか啓示は必要とされていないのであるが、それは理性の代わりとして必要とされているのではない。哲学と啓示の違いは、認識の違いであり、啓示は哲学によっては辿り着くことのできない認識を与えることができるのであるが、理性に導かれる人はそれを真理として認識することが出来ない。しかし、哲学にとって真理でないということは、啓示では問題とならないのであり、それによって啓示の正当性が損なわれることはないのである。啓示が肯定されるのは、理性によっては与えられない認識から、啓示自身の目的である服従を産出するという点においてである。これらの著者の主張を踏まえると、啓示や宗教の役割が理性の代替であると解釈することはスピノザの宗教に対する立場を曲げてしまうと言わざるを得ない。スピノザにおける宗教は理性によって考案されるものでも排除されるものでもなく、社会的な現実であるという著者の解釈は興味深い。というのも、スピノザにおいて宗教的実践はその原因が真理ではない認識であるにも関わらず肯定されているからである。すなわち、虚偽の認識から生み出された結果が肯定されているのである。このようにスピノザにおける宗教を純粋に実践的な領域において解釈することの意義は少なくないと思われる。

（おおつかたかひろ　哲学哲学史・博士後期課程）